

No.24 September 1997

特集 暮らしと宗教

— 宗教は生きて働いているか —

Womanpower



フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

特集 暮らしと宗教—宗教は生きて働いているか

くらしと宗教

おばさんは荒野をめざす

「赤いサラファン」考

このごろ思うこと

Nさんのこと

「雌松 雄松」との出会い

「ニューエイジと女性」をめぐる

女と国家—観念による呪縛—A 『古事記』 (十九)

神戸事件について

学校に出来る事・出来ない事

北須磨団地の悲劇

祈り

「神戸事件」をめぐる

例会報告 「キリスト教と仏教の間で揺れる西欧のフェミニストたち」

発表者

まとめ

感想

編集後記

表紙台字 松尾紀子／シンボルマークは「霊」を表す象形文字です。

## くらしと宗教

### —宗教は生きて働いているか

奥田 暁子

宗教は生きて働いているか——この問いを周囲の人びとにぶつけてみたら、おそらく大部分の人から否定的な答えが返ってくるのではないだろうか。「神は死んだ」と言われてから久しいが、オウム事件以後は宗教は嘲笑の対象にすらなつた観がある。あの事件以後膨大な宗教関係の本が書かれたけれども、宗教者が書いたものを除くと、その大部分が宗教に対して批判的である。

しかも今日は、宗教が批判の対象になるだけではない。倫理主義でなく自由主義で歴史を考えることを主張する藤岡信勝や、売春を善悪で判断することは無意味であるとして快樂原則を根拠に女子高生の「援助交際」を否定しない宮台真司のような論客が幅を利かせている時代である。このように、倫理観や真理を語る宗教はすっかり居場所を失ってしまったようにみえる状況のなかで、宗教は生きて働いているというのはいかなか勇気のいることである。わたしにはこの問いに

きちんと答えられるかどうか自信はないが、ともかく自分の問題として考えてみたい。しかし、このような議論をするにあたっては、その前提として、宗教とは何かを明確にしておかなければならない。そこで、まずは宗教に批判的な人びとの宗教観を見ることから始めよう。

『宗教なんかこわくない』を書いた橋本治によれば、宗教とは現代に生き残っている過去である。彼によれば、日本の宗教は四百年前（織田信長が一向宗や比叡山延暦寺を滅ぼした時代）から現実の支配システムのなかに吸収されてしまった。それ以後日本人には宗教の必要性はなくなつた。にもかかわらず、宗教が存在するのは、橋本によれば、日本では自分の頭でものを考えられない人間が多いからである。自分の頭でものを考えることができない人間は思想を人格化する、思想の人格化から始まるのが宗教なのだというのが橋本の説明である。だから、歴史が成熟して、人びとが自分の頭でものを考えられるようになれば、当然宗教は解体される、と橋本は考える。彼は宗教不要論者であるが、宗教を全面的に否定しているわけではない。しかし、宗教とは「幸福を求める人間が考え出した幸福にまつわる模索」であると定義したり、キリスト教や仏教は個人の内面に語りかける宗教で、社会や他人と

の関係には関心を持たないのだと総括しているのを読むと、この本がオウム真理教を論じるために書かれたとはいえ、その宗教理解はかなり一面的であるように思われる。

『現象学入門』や『自分を生きるための思想入門』を書いた竹田青嗣はニーチェの思想に親近性を持つ気鋭の哲学者である。彼もまた神話やフィクションの世界は中世までは大きな意味を持っていたが、現代にあつては意味を失つたと言う。竹田によれば、かつて世界には世界それ自体に客観的な秩序があると考えられていた。しかし現代の資本制社会にあつては、そのような客観存在はなく、個人がばらばらに世界像を持つていて、それを調整しながら、世界という共通理解に到達するのだという。つまり、客観とか真理とかはもともと存在するものではなくて、さまざまな世界観のなかから合意として作り出されるルールなのである。そして、人間とは基本的に欲望を持った存在であるから、現代社会に生きる人びとの生の目標は超越的な目標などではなく、自分の欲望を追求すること（竹田の言葉を使えば、世界という欲望ゲームからなるべく多くのエロスを取り出すこと）である。資本制の欲望ゲームがそのような「超越的なもの」を取り払ってしまふ本性を持っているからである。したがって、竹田に

とつては、宗教は人間の生の価値（エロスの価値）を否認するものでしかない。

橋本も竹田も宗教は過去のものものであり、現代には無用であると考えている点では一致している。そして両者とも宗教を死後のためのもの、死んだらどうなるかという人びとの不安を解消するためのものにとらえている。

宗教に救済の役割を見いだしているのは上田紀行も同様である。しかし橋本や竹田と違って、上田は宗教に対して肯定的である。彼によれば、宗教は死んでいない。それどころか、宗教は二十一世紀の地球社会に最も重要な焦点のひとつになる。彼は、長い歴史から見れば二十世紀は異常な時代なのであつて、合理性と科学技術の発展に価値をおくこのような時代はもう破綻を来している、このままでは二十一世紀は危機の時代、死の影が忍び寄る時代になる、そのような時代からの転換を図るためにも宗教を重要な要素として考えなければならぬのだと言う（『宗教クライシス』）。だが、わたしから見れば上田の考える宗教は救済の役割に偏っている。宗教に救済の役割があることは事実だが、それがすべてではないし、救済の質も上田が説くよりももっとダイナミックなものである。もし宗教を彼の言う意味での救済、アイデンティティ喪失の現

象を救うためのものであるとみなすのであれば、宗教でなくとも、たとえばカウンセリングやさまざまな癒しの方法でもいいということにならないだろうか。

わたしの立場は既成の宗教を否定するという意味では橋本や竹田に近いが、わたしは「宗教」を彼らの考えるように死後の不安を取り除いてくれる救済のためのもとは考えていない。死を身近なこととして考えなければならぬ状況になれば、また違った見方をするかもしれないが、今は、宗教は生きるための力とならなければ意味がないと思っている。わたしが宗教に批判的なのは、宗教が制度やイデオロギーとなり果ているからである。たとえばキリスト教では「使徒信条」を信じていなければ正規の信徒とはみなされない（わたしは教会には属していないので、これまで「使徒信条」について自分の意思を表明せずにすんできた。もし使徒信条への忠誠を要求されたなら、キリスト教に関心を抱くことはなかったかもしれない）。「使徒信条」というのは次のような内容である。

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを

信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより

生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみをうけ、

十字架につけられ、死して葬られ、陰府に下り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の生命を信ず。アーメン。

ここに述べられている三位一体の教義も「復活」もわたしは信じていない。十字架と復活が福音の中心であるという教義はイエスの死後、キリスト教を広めるためにパウロなどによってつくり出されたのであって、イエスの時代には存在しなかった。イエスが生きていたら、教会のようなキリスト教の組織をつくることには反対したのではないだろうか。

高尾利数によれば、キリスト教を世界宗教として広めるにあたってはギリシア語で書かれた新約聖書が大きな役割を果たした。ヘレニズム時代のギリシア語は今日の英語のように世界語としての帝国主義的機能を果たしていた（『イエスとは誰か』）。したがって、聖書は普遍性を持つてはいたが、その普遍性は大都市中心、エリート中心であって、大衆の現実的な生活に直接基盤をもつてはいなかった。しかも、キリスト教

はローマ帝国の国教となつて以来、イエスの本来の志向とは違つて、ローマ帝国に仕えるイデオロギーに転化してしまつた。キリスト教の宣教師が植民地主義の先兵をつとめたことはよく知られているが、キリスト教には最初からそのような要素があつたと言えるだろう。

宗教のイデオロギー化ということでは、最近、山之内靖によつて書かれた『マックス・ウェーバー入門』を読んで啓発されるどころが大きかつた。マックス・ウェーバーと言えば、日本では長い間、大塚久雄がその「権威」とされてきて、同じ無教会の流れを汲むものとしてわたしも彼の解釈に多少とも影響を受けてきた。しかし、山之内のウェーバー解釈は大塚の解釈に根本から修正を迫るものである。詳しいことは省略するが、ウェーバーはプロテスタンティズムの禁欲精神を評価していたと大塚が理解していたのに対して、山之内説はそれを否定している。山之内によれば、ウェーバーはプロテスタンティズム（カルヴィニズム）の禁欲精神の非人間性こそが近代官僚制という「鉄の檻」をもたらした倫理的基礎の出発点と見ていた。山之内の解釈が正しいとすれば、大塚もまた、キリスト教をイデオロギー化する間違いを犯したということになるだろう。

さて、冒頭の問いに戻ろう。これまで述べてきたところから、わたしがキリスト教に批判的であることはわかっていただけだと思ふ。それならあなたはどんな立場に立っているのかと問われるならば、わたしが依拠するのはキリスト教そのものではなく、聖書の思想、イエスの思想ということになるだろうか。

私たちは日常生活を送るなかで決断を迫られたり、現実に起こる事象についてその判断をしなければならぬことがたくさんある。そのようなとき、価値判断の基準になるのは竹田が言うような欲望だけではないような気がする（もつとも、竹田は「欲望」や「エロス」という言葉のなかに単なる快樂だけではない、人間の生きる力の源泉という意味を含めていようであるが）。もちろん、このように生きたいとか、こんなことをしたいという気持ち在实际にわたしを動かしてきたし、今もそうかもしれない。世俗的なことに關心を持つている点では信仰を持たない人となんら変わりはないかもしれない。それでも、そのような「欲望」を選択するにあたっては何らかの価値判断が働いているはずである。

たとえばフェミニズムについて言えば、私たちは誰もが一人一人の人権を守られ、男性との間に差別のない社会が実現することを願っている。しかしわたしは

女性が社会の主流にはいることを目標とするフェミニズムには距離を置きたいと思っているし、自分をどこかにおいておいて、人権や平等を声高に叫ぶフェミニズムにもついていけない。人権や平等の大切なことはもちろん認識しているし、それを前面に出すのは戦略としての意味があるのだとわかっている。自分自身が何の痛みも引き受けない生き方をするとしたら、それはわたしの考えるフェミニズムとは違うという気がする。

わたしは現実の問題にぶつかるときに一つ一つ聖書に照らして考えるなどということはないが、知らず知らずのうちに聖書の思想が決断や判断の基盤になっているということはあるだろう。奴隷となって安穩な生活を送るよりも精神的に解放されることを願って、苦難が待っていることを知りながらエジプトを出ることを選んだイスラエルの民の「出エジプト」の物語や、すべての人びとから見捨てられ、それでも絶望してしまわない第二イザヤの生き方、そして福音書が伝えるイエスの生き方から示唆されたことは大きい。

結局、歯切れの悪い言い方になるが、宗教が生きて働いているかどうかは外から形としてはつきり見えるというようなものではないのかもしれない。

(注記・くらしと宗教というテーマからは少し外れて

しまった。今号の *Womanspirit* から編集を交代で担当してくださることになり、これまで原稿集めで苦労してきたわたしとしては、なんとしても編集者の依頼に応えたいと思つて、テーマから外れるのを承知の上で、それに考察も不十分なまま、書き上げた原稿であることをお許しいただきたい。)

おぼさんは荒野をめざす

―フェミニズムと宗教について改めて思う

福島 ひとみ

小浜逸郎著『オウムと全共闘』に気になる記述がある。

「だが、しばしば一部のフェミニズムは、男性との共生ではなく、男性憎悪を自らの闘争の感情的基盤として運動理念を打ち立てるために、性差の超越や結婚拒否や家族解体や現在のエロスイメージにもとづく男女交流全体の否定など、一般女性の複雑な生活感情から

はどうていついていけないようなラディカルな純粹主義、潔癖主義に陥ってきた。私は、そうした傾向を、新しい思潮ではなく、むしろ旧左翼の思想体制をそのまま受け継ぐものとして批判した”

というものである。

しつこく言い継がれてきた男性の側からのこうした視点に対し、違和感を持つか持たないかが、フェミニストとしての分水嶺になるとさえ私は思う。

男性との共生、なるほどおおいに結構、結局いかなるイデオロギーも、最終的には”男女の共生”を謳いあげなければ、全的な支援と共感を得られないことは自明の理であろう。だがその前に、共生を可能にするための条件—現在の女と男が置かれた状況の偏向を整えることから考えてみよう。女には、みずからの「共同幻想」がなく、従って「女社会」が存在しないことは、指摘されれば誰もが気付く事実だ。そうした、ジエンダーが対等でない状況では、女が個人的に男と関わることは、そのまま「銃後の女」になることを意味するのであり、構造的に男のファシズム社会を支えることになるのである。そして大局的には、戦争、自然破壊、人権抑圧など、私たちの生存維持を困難にする事象に対して、女が決定権を持たないという冷厳な現実に行きあたる。闘争と暴力に血塗られた過去の歴史

に鑑みて、「どんなことでもする」のが男であり、もしも女がそれを阻止できないならば、将来にわたって、男は「どんなことでもする」だろうことが予想される。男が、フェミニズムにプライベートな次元での「愛の絶望」を冠すれば冠するほど、人類の生存維持に関わる事象に女も決定権を持ちたいという命題はなおざりにされて、「生の絶望」に行き着くという逆説が生じる。現在の状況で、女に「男との共生」を強制する小浜は、自分で自分の首を絞めているようなものだ。男は「対幻想」に女を閉じ込めることを止めて、「共同幻想」をこそ女と分かち合うことを試みるべきなのだ。—つがえ、つがわなければおまえは無だ—（上野千鶴子『性愛論』）という自閉的な強迫観念は、まわりまわって確実に私たちに「生の絶望」をもたらす。”男を拒否する自由”を得ることこそが、女にとっての「性の解放」なのであり、「生の解放」なのであると、解釈すべきではないだろうか。

カップルの愛のあり方についてよく引き合いに出される警句に、サンテグジュベリの”愛とは二人がみつめ合うことではなく、二人が同じ方向をみつめること”というのがある。あきらかに、前者は「対幻想」を表しているのであり、後者は「共同幻想」を表している。「対幻想」よりも「共同幻想」の方がはるかに高

い感情として扱われているのだ。私も四十数年生きてきて、最近、人間の最も気高い感情とは、実は異性間の恋愛感情ではなく、同性間の友情ではないだろうかと思ひ始めた。友情がしばしば「共同幻想」に属するものだからである。

そして私は面白いことに気づいたのだが、現代が恋愛不可能な時代だと言われているのは、「共同幻想」がなきに等しいといつてもいいほど希薄なせいなのではないだろうか。「対幻想」とは所詮「共同幻想」の付属的な産物でしかないのではないだろうか？恋愛を真に可能ならしめるためには、その前に確固とした「共同幻想」を起し上げる必要があるのではないだろうか？「共同幻想」の存在しないところには「対幻想」も誕生が困難になるといふことなのである。

現在、女に可能な「共同幻想」とは何だろうか。一フェミニズムと宗教」こそがそれに該当するのではないだろうか。フェミニズムと宗教の並立共存は可能か、どころか、フェミニズムと宗教の並立共存こそ無限の可能性に満ちた戦略であり、男が独占している「共同幻想」に扉を開いてくれる大きな風穴になるのではないだろうか。かつて私は本誌バックナンバーで、女が望んでも望んでも得られなかったもの、それは、月面着陸を果たすことでも、ジェット戦闘機を乗り回

して敵を撃墜することでも、コロセウムで猛獣と一騎打ちを闘うことでもない、ただ「神とのたたかい」であつたのだと述べたことがある。それは一見誰にも許された「共同幻想」でありながら、構造的に男が独占しており、女には参加が禁じられた観念だったからである。だが、あらゆる有機的な「共同幻想」が潰えたかに見える現在こそ、私たちは「神とのたたかい」を敢行するのだと高らかに宣言すべきではないだろうか。「神とのたたかい」とは取りも直さず、社会変革の主体になるということである。

卑近な次元では、日本の因習の打破ということになるのだが、評論家呉智英は「支配の配電盤」ということを言っている（「知の収獲」）。

「国家を家屋になぞらえ、そこに住む家族すなわち王朝が変わっても、家屋に敷設された配線や配電盤は前ものが踏襲されることを言う。王朝だけではない。ロマノフ王朝を倒したソ連の共産党政権も、クレムリンという配電盤を踏襲したのだ」

というものである。この伝でいうならば、徳川幕藩体制の配電盤をそのまま踏襲した明治維新政府ということになり、私たちが打破しなければならぬのは、徳川幕藩体制が完成させた日本のイエ制度の悪弊、ということになる。それが「神とのたたかい」を通して成

就できるのならば、素晴らしいことではないか。

常に、最も身近な敵と闘うということを経条にすべきではないだろうか。その意味では、男たちがしているように、反スターリニズムを掲げるなどというのは二義的な課題になるのではないだろうか。私たちは、最も身近な敵、つまり日本の閉塞した「イエー」をぶち壊すことに情熱をそそぐべきではないだろうか。

呉はまた、日本の宗教者についてもまことに厳しい、かつ適切な指摘をする。高名なクリスチャン学者宮田光雄の著書について、"無理を重ねて時代に迎合するぐらいなら、いつそ棄教してしまった方がいさぎよいと私は思う"と述べているが、「棄教のライン」を問われるとすれば、これは私たち信仰者が姿勢を正して聞かねばならないことである。「世事に対する妙なものわりのよさ」が宗教を墮落させている、と呉は弾劾する。これはまったくその通りで、信仰の持つ、ある種の毒とエゴイズムが抜け落ちた時、宗教は墮落し、社会変革のエネルギーを失う、と懸念しているのである。「棄教のライン」に踏ん張って自己の思念の緊張を保ちつつ、いかに他者の共感を得るまでに普遍性を獲得しうるか、それが私たちに課せられた使命ではないだろうか。

あらゆる思想、哲学、観念が出つくしたかに見える

二十世紀において、帝政ローマの末期を思わせるナチズムの暴虐を許したことは、痛恨の極みであり、私たちは心して「なぜ？」と問いかけなければならぬ。二十世紀に至るまでに欠けていたものがあるとすれば、それはただ一つフェミニズム―女の視点だったのだと断言してもよいのではないだろうか。女が社会変革の主体となることを怠っている限り、帝政ローマの末期と何ら変わらない男の蛮行は繰り返される。私たちは男からもぎ取つてでも「共同幻想」に食い込むことを果たさなければならぬのである。

私はこの頃、人類が繁栄するためには一つの法則があつて、その法則を「神」と呼んでよいのではないかと思うようになった。永続的な人類の繁栄、数量ではなく、質的な問うならば、女が「神とのたたかい」を敢行して社会変革の主体となることこそがその質的な繁栄をもたらす唯一の方法であると、男も認めざるをえないはずである。「対幻想」ばかりを女に押しつけて妙に深刻ぶつて云々している場合ではないのである。男も若者も荒野をめざさなくなったので（男と若者が現状打破の原動力になると考える方がおかしいわけだが、それにしてもこれはやはり惨憺たる状況ではないだろうか）「おばさんは荒野をめざし」、私はあくまでも社会の変革に希望を託したい。

余談だが、私はある年輩の男性から、あなたが書くような熱血文は、むしろ“女”を感じさせる、と皮肉られた。今や男は冷めてしまつて、單純に社会の変革に希望を託すような野蛮な熱血文は書けないのだそうだ。それは今の男の勝手だが、シラー、ゲーテのシェンケルム―ウンタードラングの時代には、男たちが競つて「熱血文学」をものしていたわけであるから（シラーの『群盜』もゲーテの『ファウスト』も、これぞ男の「熱血文学」としかいいようのない代物である）、永遠に男が社会の変革に身をすくませているのではなく、この男の“冷え”は一過性のものだと思つた方が賢明だろう。

男の腕力が衰えたわけではないのに男の地位の低下が著しいのは、ひとえに男の「知力」が衰えたからだと思われる。男を男たらしめていたのは、腕力でも体力でもなく、まさにこの「知力」であつたことが明白になつた。ならば、男が自ら捨て去つた「知力」を女がそのまま引き受けようという氣構えがあつていい。

いずれれ知を伴つた「男の熱血」は必ずや、性懲りもなく、ゾンビのように蘇る。そうした時に、私たちの「女の熱血」がどこまで對抗しうるか、真正面から激突しうるまでになつていゝるか、まさにこれからが正念場といふところだろう。

## 『赤いサラファン』考

### （母と娘の關係性について）

鶴岡 瑛

近頃中年の主婦層の間で「カウンセラー」への関心が高まつていると云われる。ご多分にもれず私の住む地域にも「カウンセラー」の勉強会があつて、私もしばらく前から参加している。講師は心理療法士で實際の治療にもたずさわっている人、テキストに加えて、自分の扱つた事例を（もちろん差し支えない範囲で）話してくれるのが魅力である。

出席者は私以外は主婦で、自分自身や身近に何らかの問題を抱えていて、その問題を乗り越えるための指針を求めて来ているように思われる。だが回を重ねるごとに、彼女等の現在の悩みの向こうに、自身が成育時にこうむつた心の傷が、重なつているのが見えてくる。いま子供の問題、夫婦間の悩みを話していた人が、「そういえば私の親は・・・」と話し始める。

講師の提出する事例からは、母と子（特に娘）の問題、会社人間である夫を見限つて、娘との間に強い紐帯を結んだ母と、結婚後もそれを変えられなくて、夫

との生活がうまくゆかない娘、母親の価値観に緊縛されているために、母に反発しながらも自立ができない娘、極端な例では、どこへでも母が車で送り迎えしてくれていたため、大学生になっても一人では外出ができなくなった娘など、親世代のゆがみが、次世代に再生産されてゆく世相が見えてくるように思える。

私自身が母との間に問題を抱えて育った娘のせいか、こうした母たちにも、それなりの事情はあるのだと承知しながら、どうしても私は母たちに対して批判的になってしまっているのである。

元々私はこの会で、女性に対して批判的なフェミニストと云われてきた。つまり女性差別を差別者―抑圧者である男性対被害者である女性、という単純な図式で見ず、そうした差別を安易に受け入れている、あるいはそういう〈男社会〉を逆に利用して生きる女性（その中には直接、性を売り物にすることから、いわゆる〈女らしさ〉〈母性神話〉という〈男社会〉が作り上げた通念を体現して生きることが〈女〉として善い生き方〓りこうな生き方）であるとすると女性、なんらかの理由で自身を〈準男性〉の立場に置いてどうか、いわばその権威を借りて、一般の女性を見下す資格があるかのように振る舞う女性も含まれる）の責任も問

わなければならぬと、発言してきたからである。

最近の日本のフェミニズムがゆきづまりを見せているのは、外国直輸入のフェミニズム理論では、結局こうした女性たちの意識の層に浸透することができないせいではないかと思う。同じことが仏教についても云える。なぜかを考えてみると、そうした人たちの心理の根底に、理屈を越えた〈現状肯定〉の欲求、変化を怖れる感覚があるからと思われる。

これは「諸行無常（すべて存在するものは変化する）―色即是空、空即是色（すべてのものが変化するからこそ、また新しい展開が可能となる）―を根本命題とする仏教においては、ことに問題なのだが・・。

こうした〈現状固定化〉の欲求は、主婦層に限らず、日本中に蔓延しているように思える。その証拠が「寅さん」や「釣り馬鹿日誌」の人気ぶり、延々たるシリーズ化であろう。テレビの「水戸黄門」や「大岡越前」の人気には、さすがに陰りが見えているらしいが、それにしてもあつた、内容空疎なマンネリ番組がもてはやされるというのは、どこかおかしくないだろうか。

個人の嗜好の問題だから、好きだというならそれでいいはずだが、「寅さん」などは国民的人気だという

ことで、私などにはそれが気味が悪い。コマーシヤリズムに踊らされる人が多いというか、こういうすでに一定の評価を得たシリーズ物を、むしろマンネリだからこそ安心して楽しめるというのは、精神衰弱の兆候ではないだろうか。または国民的な共同行為に参加しているかのような幻想があるのではなからうか。こういう素質は、煽情的な宣伝に手もなく取り込まれやすいだけに、ファシズムの温床である。

ともあれ、本題の母と娘に戻ってみよう。私の理解しているところでは、日本は古代から、庶民の間に嫁入り婚が定着する近世まで、同族集団である氏（うじ）に包含された母系を中心とした家族形態を持っていたと思う。当然母―娘の狂帯は強かったろう。ところが女性の地位の低下と共に父系の大家族制度が確立されると、母と娘の絆も変化したろうことは、想像に難くない。こう考えてくると日本固有のもののように云われる母―子（長男）密着の風習は、実は母と娘の狂帯の代替物として生じたものではないだろうか。いまは仮説として提出しておくしかないが、考えられないことでもないようだ。

そうとするなら、現在また次第に顕著になってきつつある母―娘の絆の強化は、日本古来の母系家族への

復帰と考えられなくもない。また高齢化する社会での老親介護という点からしても、相続権のない（嫁）に介護を強制するよりは、仕事を持った娘の子育てに実家の父母が協力し、やがて老後は娘夫婦や孫たちの世話になるという方がはるかに自然であると思う。

しかし先に見たように、いまの母―娘関係の強化が問題なしとはいえない。これからの時代に合った母系中心の家族関係がどんなものになりうるか、を考える必要がある。その前段階として、いまでも完全に過ぎ去ったとは云えない過去の母―娘関係を、ロシア民謡「赤いサラファン」の訳詞の変遷から辿ってみたい。

なぜ今頃「赤いサラファン」かといえば、最近加藤登紀子がテレビで、ロシア民謡を歌っていた中に、この昔なつかしい歌があつて、彼女が自分で訳したという歌詞に不満だったからである。

この歌は私の中学の教本に載っていた。メロディは好きでよく歌ったが、全体の状況がピンとこなかった。訳詞者、詳しい歌詞などを知りたいと図書館にも当たったが、結局わからずじまい。だからここでもおぼろな記憶を元に論じることになるが・・・。

「赤いサラファン 縫いながら やさしく母さん  
諭すよう 晴れ着の小袖はこのように 昔もいまも色

褪せず けれども私は齢老いた お前は若さを大切に  
いとしみながらも 守るよう」

と、昔の歌詞はこんな風だったと思う。古風でも悲しく、感傷的。大体若さを大切に守れ、と言ったところで、時の流れはとめられはしない。

ところがああそうだったのかと。腑に落ちたのはもつと新しい近藤伶二訳に会った。これはロシア農民の晴れ着であり、結婚の衣装でもある赤いサラファンを縫っている母と、私は結婚しないから縫わないでと言う娘との問答だった。その歌詞は

「 赤いサラファン 縫わないで 母さん 私はいりません いえいえお前 よくおきき いく春秋が過ぎ去れば 白樺さえも 枯れはてる お前も若さをいとしないで くらせと祈るも 親なれば 心に思うは 嫁ぎゆく 可愛いお前の 晴れ姿 (リフレイン) 赤いサラファン 縫う時は たのしい昔が よみがえる」

というもので、前の歌詞よりずっと意味が通る。

私が若い頃読んだロシア文学によれば、貧しい農民の娘の結婚は、当人同士の意志にはほとんど無関係に、ごくごく若いうち、たとえば家の労働力を求めるなど、親の都合によって決められるものが多かったようだ。

ある小説には「娘がぐずぐず言ったら、むりやりで

もサラファンを着せて、教会に引っ張って行く。それから先は娘の心一つ」と書かれていた。娘にとって結婚とは、そういうようなものだったのだろう。この歌詞では、母親は自分の若い時代を思い返して感傷にひたっていて、娘の気持ちに取り合っていない。

日本にも昔は似たような状況があった。たしか藤村の小説『夜明け前』にも、結婚を渋る若い娘にこともなげに「これだけの支度をしてもらえば、じきに涙も乾くさ」という年寄りの言葉があつたと記憶する。

そこには「若い娘が結婚を嫌がるのは当然」とする現実認識と「それは女なら誰もが通る道だから仕方ない。そんな感情に一々かかざらわる必要はない。それよりも立派な支度をしてやるのが当人の幸せだ」というチョー現実主義があるようだ。

そういう意味合いを持つ母娘のやり取りであるが、昔の歌の訳者である男性には、察することができなかつたものか「娘が親の決めた縁談に好き嫌いを言うなんてもつての他だ」という理由からか、母親中心の感傷的な歌詞に仕上げてしまっている。

加藤登紀子は、そうした事情を知ってか知らずか、  
「 赤いサラファン 縫うてみても 楽しいあの日は  
帰りやせぬ たとえ若い娘じゃとて なんでその日が

ながかろう 燃えるようなその頬も いまにごらんよ  
色あせる そのときつと 思い当たる 笑うたりしな  
いで 母さんの言つとく言葉を よくお聞き」

と、若さを失った女の、若い女に対する呪詛めいたも  
のが感じ取れる歌詞にしている。こちらのリフレイン  
は「とはいえ サラファン縫うていると お前と一緒  
に若返る一である。これも娘から見た場合、隠された  
母親の恐怖の本音、へ娘と同化することで、もう一度  
人生をやり直したい」という願望が明かされているよ  
うに思えるのである。

自身、けして幸せとはいえない人生を送ってきて、  
昔の母たちはなんで娘に同じワダチを辿らせようとす  
るのだらう。その時の本心はなんなのだろう。単なる  
心の鈍磨か、あきらめか、世智か、娘を自分の羽蓋の  
外へやりたくないというエゴイズムだらうか。

それに反して現代の母は、自分の手の届かなかった  
夢を、娘によってかなえようとしているかのように見  
えるのである。娘にとつてどちらがより重いものだろ  
うか。

## このごろ思うこと

野本 千津子

五、六年まえのことだらうか。私は料理上手な主婦  
になる決心をした。下の子どもが幼稚園に入つて以来、  
物理的に子育てに費やすエネルギーは、少なくなつて  
いた。それまで親子で遊んでいた友人達も、パートに  
でたり、テニススクールに通つたりと忙しくし始めた  
が、私は、エネルギーの注ぎ所が定まらなかつた。や  
りたいこともあつたが、非現実的に思えだし、あきら  
めの方がさきにたつた。独身の時も、社会で有能だつ  
たことなど一度もないので、社会参加や自己実現を求  
めて仕事を探す気持ちにはなれないし、専門的技能の  
ない中年女性の唯一の職場であるスーパーやコンビニ  
で働くのは気が進まなかつた。

経済的に専業主婦でいられる恵まれた環境にある私  
がやるべきことは、働き盛りの夫と成長期の子どもに、  
健康の源である、おいしくて栄養価の高い食べ物をも  
日供給することのようになつた。料理は好きではな  
いが、帰宅時間の遅いサラリーマンの夫と結婚し、子  
どもをもうけた時に、生涯の多くの時間を料理女（自

分のためではなく人のためにつくる人」として暮らすことを、それと自覚することなしに選択してしまったのだ。これは逃れられない運命である。

運命を少しでも楽しくするために、まず料理を好きになろう。勉強しよう。やればできる。できれば面白味がつく。面白味がつけば料理が好きになるに違いない。どうせ毎日やらなければいけないのならば、料理を好きになった方が自分にとって幸せである、と考えた。

私は料理自慢の友人に教えを請うたり、料理学校のパンフを取り寄せたり、朝からオレンジページ、レタス、TANITOなどを読みふけったりした。が、今の時代に食べ物を作ることに関心を持つことは、その安全性に関心を持つことでもある。水が危ない、添加物、残留農薬といった情報の渦の中にすぐに私は巻き込まれていった。

レモンの皮の残留農薬の記事を読んだ後で、レモンの皮入りマドレーヌを作るのは難しい。ここで私のとれる態度は二つあった。一つは「まあ、いいんじゃない」と、あまり気にしないこと。もう一つは、自然食、無添加、無農薬派になることである。わたしはそのどちらをも選択せずに第三の道を選んでしまった。詳しい説明は省くが、「料理をめぐる病」とでもいったも

のに巻き込まれてしまったのだ。この「病」に多大の時間とエネルギーをうばわれ、へとへとになり、ついに救いを求めてフェミニストセラピーで有名な「N」でカウンセリングを受け始めた。

この病のほかに私には整理しておきたい二つの事柄があった。父の事と祖母の事である。父は、私が小学校六年生の時に事故に遭い、長く寝たきりの時を過ごした。後に仕事に復帰したこともあったが、生涯、健康には戻らなかつた。私にとって父は不慮の事故によって幸せを奪われた自分の人生を恨み、嘆きの中でこの世を去った人であった。（これは、私のイメージの中の父であり、実際の父はそれなりに立ち直っていたのだとも思う。）この父の事は、私がキリスト教を求めた一つのきっかけにはなっていた。仕事や経済力や健康や自分の努力に頼り切った生活は危ない。それらは一瞬にして崩れる。私はもっと確かなものの上に立ちたいと。

父の事故の後、私は詳しい事情を知らされぬままに、祖母の家に預けられた。私と祖母との関係も、祖母と両親との関係も良くはなかつた。晩年の祖母と私の関係は悪くないつもりでいたのだが、この祖母が夢の中に現れて私を脅したことが、今回の病のきっかけになつてもいた。

この二人に関する私の話を女性のカウンセラーはひたすら受容的に共感的に受けとめてくれて何一つアドバイスめいたことは言わなかった。自分の感情をきちんと受け止めてもらうことは、不思議なことをもたらす。私はだんだんに心の整理がついていった。

父に関しては、「人生で巡り合う様々な事柄にどういったリアクションをしていくかは個人の選択である。父は父の選択をし、私は私の選択をしていく。確かなものは、私の外に形を成してあるのではなく、私が自分の内に少しずつ作りあげていくしかない」と思うようになった。祖母に関しては、「勝手に怒ってれば」と思えるようになった。

最後に「料理をめぐる病」が残った。オーバーかもしれないが、この病を通して私は時代を、主婦であることを、食べるということ、女性である事を考えた。自分の感じていることに注意深くなると、色々なものが見える。正しくないことだから、感じてはいけななことだから、感じてもしようもないことだからと、ないものにしたはずの様々な思いが生きてうごめいている。悲しみも、怒りも憎しみも、そこに存在しているならば、まず、それを認めなければならぬ。そうでなければ、それらの感情とどうやって折り合いをつけていくのか考える事ができないから。

少しづつ力を得て、外にでようとしたら、趣味の延長線上でできるパートの仕事を与えられた。この四月からは、パートの仕事をやめ、新しいことをさせていただく機会にめぐまれた。幸運な人間だと思う。自分の恵まれさかげんがうしろめたい。でも、自分の幸運をしっかりと受け止めることのできる能力は、不運に負けない力と同じくらい大切な能力だと思うようになった。カウンセリングを受けているときは、深い穴の中にいるようだった。今は知らぬ間に道を備えられた気がする。

「料理をめぐる病」は、相変わらずそこにおいて、この時間とエネルギーを奪っている。つい先日までこの病から一刻も早く解放されたかったのだが、必要があつてここに居るのだろうとも思うようになった。この病を通して私は女性一般や主婦一般ではなく、私という個人の事を考える時期にきたのだろう。

様々な事柄や人々との出会いはいつも私の努力や意志や思惑の外からやってくる。それらとの不思議な巡り合わせとその関係性の中で日々生かされている自分がいる。

## Nさんのこと

岡村 聡子

Nさんは私の親友である。初めて会ったのは今から六年程前、子どもをヤマハの音楽教室に通わせていた時、その同じ教室に彼女と彼女の子どもも来ていた。その時はあいさつ程度のつき合いだったのだが、彼女のお宅とはすぐ近所なのだということがその頃わかった。それから長いブランクがあつて三年前、私が純粹專業主婦から離脱を始め、地域の区民学級を主催することになった頃、その講師がたまたま彼女が関心をしていただくシュタイナー思想に基づくボランテニアをしていたこともあり、何かお手伝いできれば、と彼女から声をかけてくれた。それから現在まで彼女との仲は、徐々にはあるが確実に近しく強くなっている気がする。

彼女はユニークな人である。彼女の二人の子ども達はいずれも幼稚園へ行っていない。ヤマハに通っていた頃、私は上の子を近所の私学の小学校へ上げることにしていて「どうするの？」と彼女に聞いてみたことがある。彼女は曖昧に笑いながら「ウーン、どうしよ

うかと思つてー」といったつて私学の受験はどうに終わっているし、じゃあ公立へ行かせるのだろうか、それにしても悠長な人だ、と思つたことがある。彼女はその子をナント中華学院に入学させた。何でも日本人が入つてはいけないという決まりはないのだという。しかし授業は全て広東語。「ウーン、なんとかついていつているみたい」という彼女の言葉を聞いて、私はこの人はタダの人ではないな、と思つた。そして夏にはハワイのシュタイナースクールのサマープログラムに子ども二人を連れて出かけてゆく。「日本のシュタイナー教育ってイマイチピンとこないから。」と言つて軽々と出かけていくような人なのだ。

さて私が何故彼女のことを書いているかというのと、彼女はある新興宗教の信者でもあり（夫も子ども達も皆信者）、その教会の仕事もボランテニアでかなりしている人なのだ。が、いわゆる信者くささが全くない。そこに私は興味をひかれた。私を勧誘するわけでもなく、宗教を宣伝するわけでもない。これもなかなかできることではない。自分がいいと信じたものは他人にも話してみたくなくなるのが人の情というものではないか。それによく聞くと、彼女は小さい頃からカトリック教徒だったという。そしてカトリック（というかキリスト教）を評してこう言うのだ。「キリスト教は自分は

確かにどんどん清くなっていかれる。私はその頃清くなりたいたいと思っていたからそうしていた。でも自分が清くなると相手の汚れが許せなくなるのよね。そういう面がキリスト教にはどうしてもあつて、私はそれがとてもイヤだったの。」と。それが現在信じている宗教ではないのだという。入信したのは二十歳の頃。まだその宗教の草創期からのメンバーということになる。一言つてゐることは単純なだけどさ、深いんだよね。うまく説明できないんだけれど、深いの。「そして彼女を見てみると率直に、ウーンこの人はステージが高いなと思うのだ。私が幼ママにいじめられて一番苦しかった頃、いじめの確信犯だった人が彼女と同じマンシヨンの同じフロアに住んでいた（現在もそうだが）。そしてそのマンシヨンの人たちにも私の悪口というか「岡村さんはモンダイありの人よ。」と言つていたのでそうだ。なにせ同じ町内のことである。彼女の隣の人がある言葉にとまどつて彼女に相談したことがあつたという。その時、彼女は「岡村さんはたしかにある意味で力がある人でトラブルもあると思うけど、岡村さんでなければできないことをしているのであつて、本人には何の底意もないと私は思う。私は岡村さんのそういうところが好きよ。」と言つてくれたのだという。ずっと後になつてそれを聞かされて、私は心底助

かつた！と思つた。私は幼稚園のみならず、彼女の言葉がなければ町内でもはずされるところだったのだから。

そんなこんなで私は彼女に対する信頼感を少しずつ育ててきた。今は彼女が家でやっているシュタイナー思想にもとづく英語教室にウチの三人の子どもが通つているし、何かと話す機会も多い。今、彼女の信仰する宗教はたいへんな隆盛ぶり、本部のある地下鉄の駅は、その宗教のバッチをつけた人でごつたがえしている状態だ。信者は八十%以上が女性。年齢層は様々だ。私は二十歳の頃決定的にキリスト教からはなれて、田川健三氏のキリスト教批判の姿勢が私の生の支えだった。しかし私はキリスト教をはなれた時、祈りの姿勢をも放棄してしまつた。そして未だにそれに代わるものではなく迷子の子羊だ。

Nさんだから、彼女だからあの宗教を信じられるのかもしれない。私ではムリだろう、という思いの反面、私も祈りたい、自分のために世界のために祈りたい、という欲求がここ数年来日まじに大きくなつてゆく。地域ではあまり評判の良い宗教ではないけれど、彼女の信仰する姿勢にいつわりは感じられない。精神科でも、カウンセリングでも、ヒーリングでも、読書でも、フェミニズムでも救われない私。そして救いを求めて

いる私。Nさんの信ずる宗教に一度とびこんでみようかな。ダメでもともと。今、私はそんな思いでいる。

## 「雌松 雄松」との出会い

フェミニスト天理教信者としての出発点

勝又 美保

私は、熱心な天理教信者の家庭に生まれた。その環境に加えて、病気や家庭不和をも体験したため、子供の頃から割合、意識的に信仰をしていた。しかし、ここ最近、イギリス留学の体験も影響してのことか、フェミニストとしての意識が高まり、フェミニストという新しい「identity」を持った一女性天理教信者としての自覚が生まれ、それをベースとして、更に意識的に信仰を求めようとしている自分を発見しつつあるのだ。今回、有り難くも、原稿の依頼を頂いて、ぜひ「フェミニズムと宗教」にご関心をお持ちの方々に、私なりのフェミニスト宗教体験なるものを、知って頂きたいと思い（と言うよりは、人に伝えることに

よって、自分自身がしつかり認識できるように）、上記のテーマに臨んだ次第だ。

私の体験は、まず、一九九六年八月に遡る。タイトルに記した言葉、「雌松、雄松」と出会った瞬間だ。（と言うか、出会わされたという表現の方が、適切かもしれない。）この「雌松、雄松」という言葉は、天理教原典の一つである「おふでさき」の中にあるものだ。「おふでさき」とは、天理教教祖中山みきの直筆によって和歌体で、千七百十一首記された書物であり、執筆年代は明治二年より十七年までに及ぶ。「おふでさき」には、みきのしつかりとした「cosmology」（宇宙論）が記されており、その点で、みきの思想は単なるシャーマニズムの一環ではないことがわかる。天理教では、「おふでさき」は、神の社という立場であった、みきが直々に書いたもの、すなわち、それは神の直接の言葉であるという認識から非常に重要視されている。みきの執筆中は、暗闇の中にあつて、ひとりでにその手が動いたといわれる。

当時、イギリスの大学院に在学中であつた私は、修論制作で非常につかれており、「もう二度と勉強なんかするものか」と、心に誓っていた日々であつたのだが、八月のある日、そのつかれはてた自分の心が、なんとなしに私に「おふでさき」を開かせたのだ。さり

げなくページをめくり、無意識に出くわしたお歌が、次のものであった。

この木いもめまつをまつわゆはんでな

いかなる木いも月日をもわく（第七号二十一首）

この歌が私に意味したものを述べる前に、まず基本解釈を説明しなければならぬ。上記を、現代表記で記すと、以下のようになる。

この木も、雌松雄松は言わんでな

いかなる木も月日思惑

ここで「木」というのは、天理教の究極目標である陽気ぐらしの世界建設に向けて、神がその用に使う人材のことを意味する。「月日」というのは、神を意味する。雌松雄松とは、男女の比喩的な言い回しであることは自ずと理解できるであろう。すなわち、この歌の全体の解釈は、「神が用に使うと定めたものに、男、女であることは関係ない、いかなる人材であろうとも、神の思惑の中にある。」ということになる。この言葉は、約百六十年前の男尊女卑的な日本社会の時代背景をちよつと考えただけでも、ものすごい意味を持っている。みきの男女平等の思想は、実際この「おふでさき」の言葉だけに限らず、原典のあらゆるところに登場するのだ。さて、その八月の日、私の感動は、そこだけに留まらなかった。もう一つ新しい発見をしたの

である。それは、「雌松雄松」の語順だ。女が先なのである。なぜ「雌松雄松」ではないのかということだ。現代の日本においても「男女（だんじょ）」というところが自然で、決して「女男（じょだん）」とは言わない。英語圏でも変わりはない。「women and men」ではなく、「men and women」である。ただ、例外的というか、やつと、最近の英語圏のフェミニスト言語学者たちの論文に、「women and men」という用法が見られるようになったのだ。私は、たまたまその頃、そんな関係の論文をよく読んでいたので、余計にこの「雌松雄松」に魅せられたのである。

ところで、この「雌松雄松」の語順をどう解釈すべきであろうか。単なる偶然だったのであるか。昔は松に関しては「雌松雄松」というのが自然だったのであるか。興味深いことに、天理教会本部で出版された「OFUDES AKI」では、「雌松雄松」の部分が、「male pine or female pine」と訳されており、みきの神意が無視された形になっている。ちなみに、天理やまと文化会議の事務局長でおられる井上昭夫氏とインディアナ大学のマッシュュー・アイナン氏によって共同翻訳された「おふでさき英訳・研究」においては、「female o

r male pine」と記述されている。しかしながら、教会本部の失策にも無理はない。到底、英語においても、日本語においても「男女/men and women」の方が「女男/women and men」よりも自然な響きを持つからである。しかし注目すべきことは、みきの用いた表現は、この「自然な響き」すなわち、男性中心主義を前提とした上で、「常識」からは、少なからず外れてきているわけで、これはフェミニスト言語学の立場から、研究する余地があるのではないかと思うのだ。

その八月の日以来、私のみきに対する信仰は、益々確実なものとなった。何とかしてこのみきの持つすばらしい革新的な男女平等の思想を西洋社会へ、特にフェミニズムと宗教の狭間で苦しむ女性たちに伝えたいと思った。「もう、勉強なんかするものか」と心に誓った私が、もう一度勉強して、その目標を達成するだけの力を養いたいと感じたのである。みきの男女平等の思想を、この紙面ですべて説明することは不可能であり、何よりも、私自身がそれをするだけの知識と能力をまだ持ち合わせていない。しかしここで一つ言えることは、みきの男女平等論は、世間で言うところのいわゆる「男女同権論」とは完全一致するものではないということである。彼女は、母性や女性らしさを認

めた上で、「男女の隔てない」と訴えたのだ。私は、いつか、みきの思想が科学的にも学問的にも世界に認められる日が来ると信じている。実際に天理教信者の中には、そのことを確信し、精一杯の努力を重ね、すばらしい功績をあげておられる方々も多い。私はその方たちに比べれば学力も無く、どうしようもない怠け者の平凡な「おんな」であるが、「おんな」であるということに決して負けずに、みきの堂々たる生き様を雛形にして、将来的にそういった方面でお使い頂けるよう、信じて前進して行こうと思っている。

非常に“evangelistic（伝道主義的）”な文面になってしまったことを最後にお詫び申し上げます。

## 「ニューエイジと女性」をめぐる

薄井 篤子

七月下旬、「フイリ・フェスティバル・ジャパン'97」なる催しを覗いてきた。私以外にも行かれた方がいらつしやるかもしれない。当日感じたことから書き始めたい。

このフェスティバルは、一九九〇年以来、精神世界やニューエイジ・ムーブメントの情報誌『フイリ』を発行してきたフイリ・プロジェクトが主催したもので、今回は二回目。場所は東京ビックサイト。三日間のうちに、龍村仁監督の「地球交響曲」を含めた三本の映画上映、『聖なる予言』等の訳で有名な山川夫妻を始めとしてヒーラーやらセラピストやらトレーナーやら十四人のニューエイジャーによる講演会、そして百を越す団体によるワーク体験が繰り広げられ、いわば精神世界やニューエイジ・ムーブメントの「一大見本市」である。約一万人が参加したという。今年のテーマは『新しい自分との出会いー癒しの体験と自分探し』（ちなみに昨年は『新しいからだ、新しいココロ』でした）。明るい会場には香の薫りがただよい、

ヒーリング・ミュージックが流れるなかで「癒し」「魂」「気づき」「天使」「古代」「宇宙」「使命」「チャネリング」「チャクラ」などの文字が飛び交っている。

私の関心は個々の団体の活動内容もさることながら、まずはどのような人々がこの会場に集まるのかという点にあった。出展者側はいわゆる「ニューエイジっぽい人」（曖昧な表現ではあるが）も多いが、ぞくぞくと来場する人たちはかなり多様であった。会場が二ヶ所に分かれていて、一方で入場した者はシールをはっきりと判るところに張って他方の会場に移動する。すれ違う際に、シールがなければ別の催事の参加者と見間違ふほど。こちらの勝手な思いこみを覆す多彩さであった。年齢層にも幅があった。ご年輩の婦人たちのグループなど何組も見かけた。私は昨年にも参加したが、確実に昨年より参加者は多様になっていると強く感じた。

水晶石や天使の絵画、などのヒーリング・グッズと並んで、自然食品や活性水などのさまざまな健康維持商品や機器の展示も多く、精神世界と言うよりも、社会の健康志向の高まりが参加者の枠を上げたようにも思えた。ただし、私が参加したのは平日である金曜日の昼間のホンの数時間にしか過ぎず、夕方や土日に参

加していたら、また異なる印象を持ったかもしれないのだが。

ワークのデモンストレーションはどこも人が一杯で体験できず、「あなたにもできる透視とヒーリング」という講演会を覗くことにした。〈世界有数の透視能力者でヒーリングの権威〉というレバナ・シエル・ブドラとあつてか会場は満員。ここでも結構年輩の男性が多かった。二十年以上、世界各地でヒーリング・クレアポヤンスのクラスを開催し、多くの透視能力者の指導をしているらしい。日本でもすでに十三ヶ月のプログラムを卒業した人が百名を越えたと案内文にあった。三つの教会から司祭の資格を認定されているという点も興味深い。彼女の話の力点が「内なる神の発見、それとの一体感」にあったのも聖職の資格と関係しているのである。我々は神の一部であるということの気づき。「本来的に愛に満ちた存在であること」を信じる。「誰でも高次の潜在能力を持つ」といった内容はそれほど新鮮なものではなかったが、私がびっくりしたのは彼女が会場に向かって「すでに（人の）オーラを感じたり、何も無いところに色を見たことがある人？」と訊ね、実に多くの聴衆が挙手をした時である。うーん、残念ながら私には一度もそんな体験がない！オーラにはさまざまな色があるらしく、そこからその

人の感情を始めとして過去世や将来のことまでわかるらしい。誰でもからだどここのエネルギーを有効に活かすように訓練すれば、こうした透視能力がつき、自分自身も望むままの人生を送れるようになるという訳だ。からだどこを調和させて「よりよい人生を得る」「世界をもっとクリアーに見る」「自分自身を正しく知る」・・・これらがニューエイジの目指す地点、そして現在多くの人が求めているものなのである。

さて、パンフレットにはレバナのような女性が他にも多数紹介されている。ニューエイジ業界は実に女性たちが活躍する場となっている（もちろん男性もたくさん活躍しているが）。なんと多くの女性たちが海外へ渡り、指導を受けてセラピストやトレーナーやら講師になっていることか。そしてまた多くの女性たちが彼女らの講座を受講していることか。

今回の関心は現在読んでゐる『Woman in New Religion - In Search of Community, Sexuality and Spiritual Power』(by Elizabeth Putrick)の影響もあった。この本は特に「オショー（和尚）ラジニシ・ムーブメント」を詳しく調査しており、今回のフェスティバルにもオショーに関連した団体がいくつ参加していたからである。中央インド生まれのラジニシ（一九三〇〜一九九〇）は二十一才の時に悟りの境地に達し、人

類の意識を高めるための活動を国際的に展開した。現在、三十二ヶ国に五百以上の彼の弟子たちによる瞑想センターが存在する。日本人の弟子はおよそ三千人と言われ、全国十九ヶ所に和尚瞑想センターがある。組織的な宗教教団というよりも、書物や瞑想の指導を介しての緩やかなネットワークを形成している。この本のように欧米で最近注目されている「New Religion」とは、日本で言う「新宗教」とは異なっており、むしろ「新霊性運動」と称されているものに近い。

Putick は、宗教、特に新宗教における女性をテーマにした論文を多く発表している研究者だが、その調査は研究者としてのみならず、実際に信者としての活動体験や知識が大きな役割を果たしている。一九七〇年代の様々な運動―フェミニズム、環境保護、自然食、政治活動、CRグループ、東洋宗教、そしてラジニ―シ・ムーブメント―に加わった彼女は、往々にして批判的な視点で紹介されがちな新宗教運動（NRM）に対して、まずはこうした運動体において女性たち自身がどのような体験をしているのか、彼女たちの声を聞き取ることの積み重ねを主張する。

キャリアでの成功や幸せな家庭を築くだけの能力を備えたように見える高学歴の女性たちがオショ―の弟子になるといふ人生を選択するのは一体何故か？ そ

う問うた後、彼女はこう考える。「女性たちはスピリチュアリティを模索しており、それを実感させ、メンバーの一員としてエンパワーメントしてくれるのがNRMなのである」と。だが、彼女はNRMを単純に評価しているのではなく、大いに問題視もしている。特に強力なカリスマ性を持つ男性リーダーへの絶対的な帰依というNRMの重要な特性について批判的である。それは特に女性にとつて重要なポイントになる。たとえばオショ―は女性の持つ特性は男性よりも優れていると高く評価し、女性信者たちを上手にプロモートしたため、女性信者たちは他の領域では適わぬリーダーシップとしての能力を発揮し欲求を満たすこともあったであろう。だが、一見性的関係やジェンダーを超越することが目標になっているにもかかわらず、男性リーダーの絶対的な権威の下で女性信者たちが性的存在として利用されているように見受けられる事例はめずらしくない。

NRMの研究は確かに七〇年代以降の社会変動という新たな時代動向を十分考慮する必要がある、女性の参加や霊的探求についての分析もフェミニズムなどの運動の影響を無視することはできないであろう。そういった意味では「宗教と女性」を調査分析する側にも従来にない新たな視点が要請されるかもしれない。だ

が、その様々な要素―西欧と東洋、古代と未来、靈魂と身体―が入り乱れて混沌としたメッセーヂの背後には、非常にシンプルで古典的なテーマが再検討を待っているかのようにも思われる。女性たちが宗教において果たすリーダーシップとはどのようなものか？ またそれは可能であるのか？ 宗教は女性を抑圧するのか、エンパワーするのか？ これは多くの「宗教と女性」研究の中で繰り返されてきたことであるが、問い自体は単純であつても、それに答えることは大層難しい。加えて現在進行中の運動を調査することの難しさもあるものの、女性研究者らが調査を行つて、執拗に問い続けることの必要性は強く感じた。

まだ日本において、オシヨーを始めとしてニューエイジ的運動は研究対象としてさほど注目されてないように思う。強力なカリスマ性を持つ男性リーダーのもとでの女性信者たちの動向については、オウム真理教や統一協会などを通じて批判的な視点が強まったが、この本のように調査に基づいた社会的研究はまだ着手されてはいない。ニューエイジの紹介として「自己変容の力は個々人の内側にあると説く。指導者は手助けをするのみ、力の源泉が指導者の中にあるわけではない。帰依や特定の組織や聖職者を必要としない」という文章を最近見かけた（「新宗教新聞」八月二十五

日版、第八四七号）。Putickは「悟りや救済に達するためには指導者への絶対的な帰依が必要という考えが強まっている」状況を問題視したが、この紹介文を見る限り日本ではこうした「自己教」というニューエイジ観が一般的のようだ。今後どのような運動へと発展するのかはまだ不明瞭ではあるが、今回のフェスティバルへの参加状況を考慮してみれば、ニューエイジの魅力が浸透しつつある状況は明らかである。信者となつた Putick ほどではないにしても、自分たちが歩んできた思想状況から生み出された運動体を分析することは、同時代を生きる自分自身もまた大いに問われることになる。個々の活動についてはともかくも、全体の方向性は自分の思想の中かなり共通する部分があるのは否定できない。フェスティバルの会場において感じた落ちつかぬさは、理解できない違和感というよりも、いつものように調査対象との距離感がうまく取れずにいたためである。これもまた Putick が主張していることだが、NRMにおける女性たちを対象とすることは、科学的客観性という名の従来の男性中心的な研究視点を超えて、新しい自己と世界を創造しようとしている女性たちの努力を認識・理解し、調査するための我々自身のメソッドを開発できるかがまさに問われる作業であるようだ。

## 女と国家

### ― 観念による呪縛 ―

#### A 『古事記』 (十九)

河野 信子

若い女 箸は、中国の文化が生んだすばらしい人工物である、料理の先生がおっしゃいましたが、三世紀頃は、日本の習俗としては定着していなかったのだから、どうでしょう。『魏志倭人伝』の「倭の地は温暖」にはじまる節には、夏も冬も、生のものを食べ、誰もが、はだしで歩き、家はあるが、父母兄弟は、同じ家で起き臥しているわけではない。食事は、高杯（たかつき）を用い手食する。と書かれていて、要するに箸は使っていないと書かれています。となると、『古事記』のスサノヲの八俣の大蛇（おろち）退治の折に、河上から流れて来た「箸」とは、いかなる物でございましょう。神話に時間はないと申しますが。

老婆 とは申しませんが、七、八世紀にできたこの神話では、スサノヲは、皇祖神「アマテラス」の弟というようにしていますので、時間軸を横軸にとると、

「ジンム」以前に持って来る意志はあったのだから、ましよう。なにしろ、私は、昭和十五年に「紀元は二千六百年」と祝われた世代でございませぬ。神武の即位が紀元前六六〇年ならば、この頃、箸を使っていたのは、中国であつて、倭の国ではありません。

若い女 となると、この箸は、弥生後期の習俗から生まれたものか、それとも外国の物語かということになりまして、スサノヲをめぐって、奇説が多く出まします。なるほど、思われます。

老婆 最近「スサノヲはキリストであつた」といった本も出ていますから。石川三四郎は『古事記神話の新研究』（初版は一九二一年）で、ペルシャ海に沿うた一帯にスサノヲは北方から追放されたと見ています。この本は、私も若い頃愛読いたしました。信じたわけではありませんが、面白くて、壮大で、「巻を置くとまなし」といったところもございました。となると箸はどうなるのかと、話が複雑になってまいりますが。

こころあたりで整理しておきましょう。いまのところ、箸が倭国に伝わりましたのは、弥生後期で、それもピンセットの様なものであつたと、新井白石は『東雅』（一七一九年）に書いています。それも弥生期は、もっぱら、神に供えものをするために用い、「食事用」となつたのは、七世紀前後だといわれています。従つ

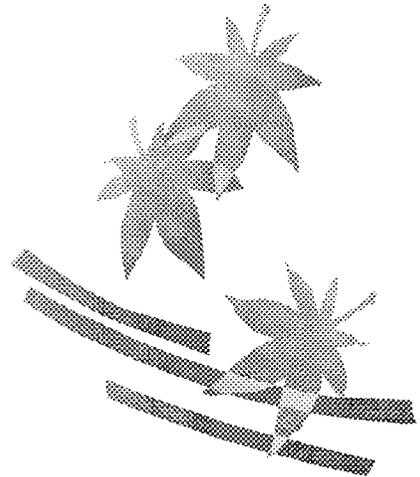
て流れてきた箸は、神事を想定して、とか、八姫の父を「国つ神」「大山津見の子」といつているところから、その地の王権の問題を、語りこめているともとれます。

若い女 いわゆる民族学のほうで、最近、活気を持って参りました「外来の王」にまつわる神話でしょうか。それにしても気になりますのは、「箸墓古墳」をめぐる伝説について『古事記』と『日本書紀』の記述の差異性でございます。箸墓につきましては、壬申の乱（六七二年）の戦場でもございましたので、実在ではあります。この箸について『古事記』には、ヤマトトトヒモモソヒメが箸でホトをついた話など出てまいりません。

崇神天皇の項で、ひとりの美人の子が「神の子」である由来が書かれているだけです。「美男」の裾に、糸をつけ、糸をたどれば、三輪山の神であったと、書かれていますでしょう。

老婆 『古事記』と『日本書紀』の伝説部分の記述の差異性については、奥田暁子氏が「王権と女性」（『女と男の時空』1、ヒメとヒコの時代に所収）でもふれておられます。今回は、この謎の多い部分を語り合いとさせていただきます。（この項つづく）

## 神戸事件について



## 学校に出来る事・出来ない事

屋代 道子

神戸市須磨区でおきた淳君殺害事件は、犯人が近所に住む中学生であったこと、それまでも小動物や小学生の女児を殺害していたことなどが明らかになるにつけ、日本中の親達を震撼させた。この間、新しい事実がつぎつぎ明らかになるとともに、マスコミの論調も日々変わってきた。逮捕直後は、少年が神戸新聞に送り付けた挑戦状から、学校の管理教育や体罰に原因があるのではないかと疑われていたが、その見方もこの頃は薄れ、少年の精神異常が疑われるようになってきた。

しかし、わたしはこの事件の原因を、少年の人格の特異性に求めることに、一つの点で不安を感じている。一つは言うまでもまいことだが、この事件が原因で、心の病に苦しんでいる人たちに対する差別が、ひどくならないかという点だ。わたしはそのような人を何人か知っている。彼らはその病のため、就職や家庭生活、対人関係の維持が困難で、献身的な家族やボランティアの助けで、生活しているが、決して簡単に人を殺そ

うとしたりしない。心を病んでいる人たちにとっても人を殺すのはきわめて異常なことなのだ。だから、犯人の少年の連続殺人の原因が、単に少年の精神異常のせいだとは思いたいのだ。それがわたしが感じる二つ目の不安な点だ。

一般的にいつて、人が人間関係の生じている相手を殺す場合、心の抑止力を乗り越えるような強い動機があるはずだ。たとえそれが「金を盗む」といった身勝手なものであったとしてもだ。一方で、相手を自分と同じ命の重さを持つ人間と感じていない場合、ずいぶんひどいことを、平気で言ったりしたりする。わたしはカトリック教会で福祉委員をしており、釜ヶ崎に送るため、お米やお金を集めることがあるが、そのことを「どぶに金を捨てるようなもの」と言う人は、教会のなかにもいるものである。また、婚外子を「船に料金も払わず不当に乗り込んだ定員オーバーの乗客」にたとえ、「船が嵐にあったとき、船を守るためこのような乗客を海に投げ込むことは正しい」として、「中絶は不当だが、婚外子に対しては中絶も正しい」といった神父もいる。相手を人間とみなさない場合、「教養ある人」でもどれほど残酷になれるかという良い例である。また関東大震災のあと悪質なデマが流れ、朝鮮人や中国人が一般市民に虐殺されたが、阪神大震

災のあとは同様なことは起きなかった。阪神大震災でとくに被害の大きかった神戸市長田区は、在日コリアンをはじめ多くの外国籍の人たちが暮らしているが、彼らと近隣の日本人との間に人間関係が生じていたことが、事件となることを未然に防いだ。この少年の場合も同じようなことが言えるのではないだろうか。

少年が神戸新聞に送った挑戦状のなかで、こどもを殺すことは、「野菜を壊す」と表現されているし、また淳君の口に入れられた紙に「汚い野菜どもに死の制裁を」と書かれている。これは少年の心の正直な表現だったのではないかとおもえる。少年は、自分より弱いこどもたちを、人間と感じていなかったのではないだろうか。少年の他人に対する「情」の希薄さは、マスコミ等によっても指摘され、文部大臣がさっそく「心の教育」を行うよう各学校に指導したと報道されていた。しかしわたしは学校で行う「心の教育」の有効性に対し疑問を抱いている。学校教育が、人の命の重さというものを、言葉だけではなく心から感じさせることに対し無力であることは、前出の神父の例で明らかではないか。今の学校が悪いと一概に言っているのではない。「心の教育」は、人と人とのときには痛みや悲しみをもともなう、真に豊かな関係のなかでしか育まれないものではないのか。痛みや悲しみ、ときには怒

りや憎しみといったマイナス要因と思われていたものを排除した人間関係は、実はきわめて薄っぺらで貧しいものではないのか。

この事件の根っこには、親達に、できるかぎりマイナス要因とされているものを排除して、言葉を換えると良い環境の中だけで、こどもを育てるのが良い教育だと思わせてきた、この日本社会の雰囲気があるのではないか。マイナス要因の価値とは弱さの価値である。それは、釜ヶ崎に住む人々や、婚外子や、障害を持つた人々や、日本国籍をもたない人々や、身寄りの無いお年寄りや、その他すべてのいと小さき人たちの命の重さを信じる価値である。これらは、学校で教師が教えようとしても教えきれものではない。本来家庭の中で、親がその後ろ姿でこどもに伝えるべきことである。今の教育行政をはじめとして教育を取り巻く環境が、家庭に学校の勉強の下請けをさせ、家庭からこどもの心を育てる力を奪ってきた。「心の教育」を学校で行うことは、これにますます拍車をかけることにならないかと懸念している。

付記・神戸では少年の名前や父親の会社等さまざま

まなうわさが流れています。わたしはそれ等にできるだけふれたくなかったので、あたりさわりのない文になってしまいました。

## 北須磨団地の悲劇

―思ったこといろいろ

江口　みりあむ

私は毎週水曜日、バスに乗って十分ほどで行ける高齢者・障害者専用の仮設住宅でボランティアをしている。寂しい人の話相手をしたり、一人で出かけられない人に付き添ったり、簡単に楽しい「作業」である。住宅の近くに生協があり、そのボランティア・サークルの女性たちがときどきおやつなどを作って配る以外、近所の人々はこの仮設住宅に一切顔を出していないのを残念に思う。

仮設住宅の居住者たちは、震災でたいへんな体験をし、また抽選制度によってそれぞれの下町で親しみあっていた人同士がばらばらに散らばされた。しかし、時間がたつにつれて、そのトラウマをなんとか乗り越え、住宅内で友達を作り、ある程度、落ち着いてきている。この仮設住宅を永久住宅にしようという提案も出たが、周りの団地の人々が反対したため、去年の末、しかたなく見合わすことになった。北須磨団地のことである。

以上のことがらはその北須磨団地内で起こった十四歳の少年による連続殺人事件とはなんの関係もないかもしれない。ただ、自分の団地に誇りを持つ人々の優しさのないことや、心身になにかの「異常」のある人に対する否定感・排除感の一例としてあげておこうと思つた。

今回の連続殺人事件について、私がいちばん聞いたのは数年前から異常な行動を示してきた少年はなぜ、その異常精神を診断されないままにいられたのだろうか、ということである。

犯人が捕まつて、その犯人のさまざまな発言をみて、私はずまず思つたのは、「きつと精神分裂か、その他の行動障害や精神障害があるに違いない」。そして、日本に滞在する他の欧米人や、最近カナダへ里帰り中に会つてきた家族や友人にこの事件のことを話すと、皆、私と同じ反応を示した。でも、日本のマスコミにしても、近所の人々にしても、精神病の話はほとんど出てこない。逮捕直後にみんなの関心は、証拠探しか、少年法とか、社会的環境や学校の影響とかに集まつていた。思春期に現れる先天的行動障害その他の精神病の話は、赤旗のあるコラムでみかけたもの以外は私の目や耳に入つてこなかった。欧米人と日本人との反応の違いは著しかった。

私は七月十五日から八月二十八日まで里帰りしており、この記事を書いているのは八月二十九日。そのあいの日本の情報は見ていない。だから、七月中旬から今までの、マスコミの取扱い方については知らない。でも、今朝の新聞を見ると、この事件の関連で載っているのは、やはり少年法の話と学校生活の話と暴力的なホラー・ビデオを十五歳以下の少年に貸さないという記事だけである。

数年前から異常な行動を示してきた少年はなぜ、その異常精神を診断されないうままにいられたのだろうか。たいへん恐いことと思いませんか？同じように診断されていない子どもがほかにいっぱいいるかもしれない。先天的な精神異常の多くは、薬とカウンセリングで対応できる。しかし、「精神的異常」を認めたくないこの社会では、精神科医やカウンセリングの専門家でさえ、徹底した診断や検査を行っていないのではないかと感じることもある。(例えば、今日のニュースにあった、父親に殺された少年のこと。父親の話によると、ある日突然、少年が暴力的な行動を示し、それが続いた。なのに、相談にのった精神科医はそれを医学上の治療を必要とする病的なものとして扱わず、その結果、悲劇に終わったと考えられる。)

私は、今回の少年の殺意を、社会的環境や学校のあ

りかたなどによって説明できるものであるとは思っていない。だからといって、社会や学校に問題がないということにはならない。今までも、学校における体罰や苛めが原因で自殺したり、殺害されたり、傷つけられたりしてきた子どもたちが多すぎる。センサーショナルな殺人事件が起こって初めて注目すべき問題ではない。ただ、異常な行動を、単に環境の産物として片づけると、精神・行動障害のための適切な診断と治療が十分に行われていないことを見逃す心配がある。これからの進展を興味深く見ようと思っている。

## 祈り

千葉 悦子

今から五年前のことになる。長男が小学五年になった時、T先生がクラス担任になった。

さわやかなスポーツマンタイプの先生で子供からも親からも人気のある評判の先生だった。五年になると息子はその日の授業や先生の話をよくしてくれる様に

なったが、その話の端々にT先生の指導力と大らかさのもとで子供達がよくまとまり、のびやかに成長してくれている事が感じ取れた。日直になった生徒は新聞当番も兼ねた。新聞当番とは新聞記事の中から自分が関心をもった記事について発表するという係である。

そのニュースをめぐって、ディスカッションになる事もあった。新聞を読む習慣などなかった息子も、当番に当たると、前日から一所懸命に新聞を読み出したものだった。又、特に宿題を出さない代わりに先生は全員に日記を書かせた。多忙な毎日にもかかわらず、その一つ一つに先生はユーモアまじりのコメントを赤ペンで添えてくれた。先生の適切な指導が子供達の学習への意欲を生んでいった。今でも印象に残っているのは、次第に子供のノートの文字が丁寧に記述される様になっていった事だ。用事で学校に行ったついでに教室をのぞくと、子供達が楽しげに先生を囲んでいる風景にもよく出くわした。

大事な成長期にT先生に受け持つてもらえた事は子供にとつて「めぐりあい」だったとさえ私には思えた。又、個人面談の機会などに息子に関する心配事を相談すると、「いや、〇〇にはこんな一面もありますよ」と、違う視点での見方を教えてくれたり、私にとつても頼りになるアドバイザーだった。買い物の途中、同じク

ラスの母親に会うと、T先生になってから子供が変わった、という話がどちらからともなく出たりした。

そういう親たちの願い通り、六年に進級するとT先生は持ち上がりで再び子供達のクラス担任になった。卒業の年のクラスというのは子供にとつてとりわけ思い出深いものだ。この子供が大きくなって、高校、大学と進む頃、友達と一緒にT先生のお宅に伺つては近況報告や思い出話に花を咲かせるのだろうな、とふと想像する事もあった。

その頃、勤務していた会社の一セクションがバブル崩壊後のリストラの対象となり、私は職を失った。その時、私は真つ先に「今度は教育にかかわる仕事に携わってみたい」と考えた。それは、とりもなおさず、私がT先生から「教育の可能性」を教えられたからだった。私は新聞の求人欄を探し、ある塾の国語教師となる事ができた。

その日はのどかな日曜日だった。翌日から小学校の夏休みが始まる。息子は楽しみにしている日光の林間学校の準備を、私は初仕事となる塾の夏期講習の準備をしている最中だった。突然、電話がかかってきた。PTAでクラス委員をしている人からだった。

「T先生が逮捕されました。この件で明日臨時保護

者会が開かれます。」

タイホ？ 一体何のこと？事情がのみこめない。

「知りませんでした？新聞に載ってますよ。テレビでも朝から何度も報道されてるし。」

頭が一瞬空白になる。受話器を置き、急いで新聞を開くと、社会面に：：確かにあった。

“東京の小学校教師、同僚の夫を殺害した容疑で逮捕”

数年前から保健室の養護教諭と親密になったT教師が一年前にこの教諭と共謀し、夫を殺害して山林に遺棄した、という。まだ記憶している方もいるだろうか。当時はセンセーショナルにワイドショーや週刊誌で盛んに取り上げられた「教師W不倫殺人事件」の事である。

T教師は一年前、小五のクラス担任となった年の夏休みに不倫相手の夫を惨殺し、車で死体を運んで遠くの実山に捨てた。そして一年間、何事もなかったかの様に「素晴らしい教師」を演じていたのだ。

翌日、臨時保護者会が開かれた。学校側は学校内から教師二人の容疑者を出した事で動揺は隠せなかった。親達は、何故T先生がこんな事をしてしまったのか、子供達が受けたダメージをどう建て直せばいいのか、混乱したまま心情を吐露した。会場のいたる所か

らすすり泣きの声が聞こえた。

私の塾講師としての一日目も、教壇に立つ、という慣れない仕事に加え、この事件の事が頭から離れず、実際には人にものを教えるという状態ではなかった。次の日も次の日も、考えるのは事件のことばかり。食事もまともにものを通らない有り様。何かの間違いであってほしい。つい先日の林間学校の説明会では「何か分からないことがあったら、どんな小さなことでも結構ですから質問して下さい」といつもとかわらぬ様子で私達に語りかけていたというのに。

ある時、山林を飼い主と散歩していた犬が白骨死体を見つけ、飼い主が警察に通報した事が発覚のきっかけだったという。死体の身元を洗ううちに、捜索願いが出ていた男性だった事が判明したが、失踪前後の妻の行動から、妻が殺害にかかわっている事が疑われ、更にその妻と関係の深かったT教師へと警察の内偵は進み、ほぼ容疑は固まったが、生徒への影響を考えると、夏休みに入る前日の逮捕となったという。先生は捜査の手が身近に及んでいるとは知らなかったのだろうか。息子の日記帳を開くと、逮捕される日の直前まで日記に先生の暖かいコメントが記されている。そんな先生らしい痕跡に触れると、怒りよりも同情の思いで一杯になった。数カ月前の個人面談があった時、私が

教室に入ろうとすると暗くなりかけた教室に既に先生はいて物思いにふける様子だった。おそらくこの一年間というものの、事件の発覚におびえる毎日だったに違いない。突然の逮捕の時、二人のお子さん達はどんな思いだった事か。そして奥さんは・・・

道で同級生の親に会うとT先生の話をしているうちにお互いに涙ぐんでしまうのだった。

事件当時、私はテレビをつけるのが恐ろしかった。惨殺までの経過を再現ビデオで事細かく放送する番組もあった。又いつごろから、どの様に相手の教諭と親密になったのかとか、職員室の机から押収されたメモ類が公開されたり、これら興味本位で取り上げられる情報が一つでも子供の目に触れるのを恐れた。この事件の関係者はすべて「堅い」職業にある人々だった。

T先生の妻も教師。殺害された男性は中学教師。T先生の父親は警察官でT先生の弟も先生だという。こういった背景も又マスコミのかっこうのネタになった。

この事件を当の子供達はどうかとらえたのかは大人達には分からない。息子はその日以来、「T先生」の名を一切口にしない。毎日の様に学校での出来事を生き生きと話してくれていたのに「小学五年、六年」の二年間は息子の中で封印されてしまったかの様だ。

そして彼は今年高校一年になる。ある親しいお母さ

んから、最近、何げない会話の中で子供の口から先生の名が事件以来初めて出たという話を聞いた。やはりどの子にとっても、あの先生とあの二年間が心の奥底の触れてはならない場所にしまわれたのだと今更ながら思い知った。毎日教室で授業を受け、休み時間にはドッチボールをし、全くの信頼を寄せていた担任の先生が犯した取り返しのない過ち。T先生が問題の解決法として「殺人」を選んだという事が子供達の内部にどんな亀裂を生じさせたか。それを語ることできない子供達の心の闇。深淵にある傷。

私は真実こう思う。――T先生は一人の人間を殺した」だけではない。「三十五人の生徒を殺し、かつての教え子達をも殺した」のだ」と。

.....

神戸の事件に思いを馳せつつ、四年前、身近に起こった事件を長々と書いてしまった事を許して頂きたい。他人にとってはどこにでもある様なありふれた事件でも、その周囲にいた人間にどれ程深い痕跡を落とすものなのかという事を書きとめておきたかった。

さて、今回の神戸の事件はオウム事件以上に私に重苦しいものを残した。オウム事件は松本智津夫という特異な個性が発点となって起きた事件であるのに対

して、神戸の事件は日本社会の病巣がすでに日本の中枢に至っている事のあらわれの様に感じられた。私はそれ程多くの論考に接しているわけではないが、識者の書いたものの中では灰谷健次郎の手記（「FOCUS」七／九発売）と、事件の中に阪神大震災との関連を読み取るうとした藤原新也の文章「バモイドオキシ神の降臨」（「文芸春秋」九七／九月特別号）が出色のものと思われる。今後も様々な立場からの考察がなされるだろうし、第二の酒鬼薔薇を生まない具体的な努力を大人はしていかなければならない。私も又、神戸事件からつきつけられたものを何らかの表現に変えようと思っている。

今、ここでは私はせめて遺族の方達の心情を思いたいのだ。お母さん、お父さんに大事に育まれていた土師淳君と山下彩花ちゃん。淳君と彩花ちゃんの、可能性に満ちた将来の全てが少年Aによって一瞬の内に闇に葬られてしまった。ご両親の悲嘆の深さは察するに余りある。少年Aは、淳君、彩花ちゃんを殺しただけではない。そのご両親達、兄弟、姉妹達を本当に殺してしまったのだ。そしてマスコミの無神経さが遺族の苦しみに更に追い打ちをかけているのを推察する。淳君の写真を何のためらいもなくテレビに出し、雑誌に掲載できる無神経さ。暴力。そして淳君についての心

ない報道。そういえば四年前の、あの時も小学校の校門前には多くの報道陣が待ち構えて子供達にマイクを突き付けていた。当のクラスの子だと分かると、動揺する子供達に向かつて先生について執拗に聞き出すようになっていた。

愛するわが子を殺され、そればかりか遺体を切断までされた事の苦悩、そして子供を守れなかったという慚愧の念はいかばかりのものか。私はとても他人事とは思えず、淳君のご両親に励ましの便りをしたためようと思った。文面を考え続け、そして結局断念した。一体どんな言葉が励ましになるというのだ。そんな言葉はこの世に存在するはずがない。

信仰を持つ私はせめてこう祈るばかりだ。

淳君を知り、彩花ちゃんを知り、少年Aを知り給うていた神よ。殺害の一部始終をご覧になっていた神よ。二人の魂があなたの御もとで永遠の安らぎの中にあります様に。そして、どうか残された人々に生きて行く力を与えて下さいます様に、と。

# 「神戸事件」をめぐる

藤田 たかし

事件、と理解しておこう。

「神戸事件」は、さまざまな問題を投げかけました。

## 1 少年法と刑事罰

「えっ、あんなムゴイこととして、2、3年で少年院出てくるんやて？ほんま、こわいわー！」

## 2 家庭教育と学校教育

「どんなキョーイクしてたんやろ？オヤの顔、見たいわー！」

「学校のセンセもセンセや。ちゃんとキョーイクしてもらわんと、ほんと困るわなー！」

## 3 生徒と教師（学校）との関係

「オマエなんか、もう学校にくるな！」なんて言われてたんやて・・・」

## 4 地域社会と学校

「\*\*さんとこのボンボンな。ウエが2浪してキョーダイの法科、司法試験、受けますねん。ナカが、\*\*高校、5番で出て、ハンダイの医学部。シタのがバイク乗りまわしてアレテンのやて・・・」

## 5 マスメディアと人権

「あんな大事件や、実名、顔写真、載せてどうせんやと思うけどな」

## 〈1〉「神戸事件」とは

「神戸の少年、十四歳」が、ヤラカシテしまい、オトナ社会、地域社会を震撼せしめた事件を、「神戸事件」と仮称しよう。

事件の全貌は、とうてい知りえませんが、

- 1 十四歳の中学生が
- 2 小学生を連続殺傷し
- 3 肉体を切断し
- 4 校門前に放置し
- 5 犯行声明文を、マスコミに送りつけた
- 6 猟奇的、挑戦的で、情報化社会を象徴する

「そやかて、まだ中学生でっせ、ちとやりすぎとちがう？」

## 6 異常心理と社会

ばら蒔かれ、洩れてくる情報を、再構成してみました。このような「神戸事件」を、トータルに論じるには、もう少し「醜態」する時間が必要と思われます。

そこで、心的レベルで、つまり

「何が、彼をして、そう、させたのか？」

という、いささかマンネリぎみの問いからですが、アプローチを試みてみました。

### 〈2〉ヒトに潜むもの

晩い春の午後の公園。私は、散りゆく桜を娛しんでいました。とつぜん、視界のかなた遠くを、黒い影が桜吹雪をななめに走り、地上のハトに覆いかぶさったのです。他のハトたちは、いつせいに舞いあがりました。黒い影は、カラスでした。カラスは、鋭い嘴を突きたて、切り裂き、肉片を飲み込み、ときおり奢ったような視線を、あたりに投げかけていました。バギーを押していた若い母親は、畏れの表情をあらわにし、顔をそむけました。ベンチの老夫婦は、しばらく茫然としていましたが、

「ケダモノは、これだから・・・。野蛮だなー」と、いまましげに呟いたのです。

ヒトをのぞく、動物は、ケモノ（獣）は、本来的に野蛮、残酷、残虐な心性をもっているのでしょうか？

アウシュヴィッツやヒロシマのホロコースト。拷問具の「鉄の処女」と異端審問。『海と毒薬』、『悪魔の飽食』で告発されたヒトの魔性。

「私にできることは、なんでもおつしやつてくださーい」と、「美しく」装われたことばの奥に潜む偽善。自己が生き延びるために、他者を利用、陥れる。そのような「カルネアデスの船板」は、いたるところに見られます。ウワサやカゲグチ、シカト（集団的無視）・・。その暴力性、攻撃性、残忍性は、肉体に加えられるものに匹敵さえるのです。

動物は、ヒトのような奸智や策謀を用い、同じ種（シユ）のなかで、憎しみあい、苛めあい、抹殺することのないことは、ロレンツやティンバーゲンらの動物行動学の知識を借りないでも、あきらかです。

では、オトナの心に潜む魔性を認めるとして、コドモは？

コドモは、「タブラ・ラサ」、つまり白紙の状態で生を享けてくるといわれ、本来、純粹無垢なのでしようか？

ペスターロツチは、古典的、楽観的、理想的な児童観を記述し、アリエスは、従来の誤った児童観を修正し、すぐれた業績を残しました。

そしてフロイト。コドモの性衝動を記述したとき、オトナは、驚愕し、眉をひそめ、ついには非難の声をあげたのです。彼は、オトナ―コドモの心性の連続性を指摘したかったのではないでしょうか。

文学や漫画のなかにも、コドモのなかに潜む、魔性、根源的な悪への傾きを指摘した作品があります。

ジャン・コクトーは、『恐るべき子どもたち』で、善悪の判断力のとぼしいコドモの本性が、盗みなど、悪におちいる姿を描いています。

『アキラ』という漫画では、シワだらけの、いかにも老人風のコドモたちがオトナ社会、世界を震撼させるといふスリリングな作品でした。

コドモは、オトナを縮小した「コドナ」では、もちろんありませんが、コドモ―オトナと連続した存在。つまり、根源的悪への傾向、傾斜という、負の心性を持ちあわせていることを意識しておくべきでしょう。

### 〈3〉トラウマ―『白い人』から

この事件を知ったとき、『白い人』（遠藤周作著）に思いをめぐらしていました。

十二歳の「私」は病気で学校を休んでいた。二階の部屋からは家の前の路が見渡せる。のどかな風景の中で「私」はある光景を目撃する。

「私はふしぎな光景を見た。家の女中のイボンヌがジツと路の隅にしゃがんで、なにかを手招いている。時々彼女は片手から一片の肉をだして、それをふつてみせる。私は訝しく思った。

病犬は咳きこみながら、イボンヌの方にヨロヨロ近づいていく。彼は、しゃがみこんだ彼女の両脚の間に首をたれて、哀願するような姿勢をとった。

と、イボンヌは、肉片のかわりに一本の紐を手にした。片膝でもがく犬の首をおさえつけたまま彼女は老犬の口を一瞬にして縛った。私は窓に上半身を凭れさせたままふるえていた。イボンヌは、肉片を、もう開くことの出来ぬ犬の口先に、なぶるように持つていく。

（中略）

今日でも私は何故、あの女中があのようなことを演じてみせたのかわからない。恐らく彼女は、私の家から肉片をぬすんだこの老犬に復讐したのであろう。しかしその行為は、窓からそれを覗いていた十二歳の少年の生涯に決定的な痕跡を残した。」

主人公は、ナチス・ドイツの占領下、ゲシュタポ（秘密警察）に通じ、レジスタンスを裏切り、敵側に仲間を売り、苛酷な拷問さえ加える。

そのような「悪しきユダ」の心性が、どのように巣くうようになったのか？その理由の一つは、「イボンヌ体験」であり、一つは、アデンを旅行したときの、少年との加虐的な経験、「アデン体験」なのです。

「神戸の少年、十四歳」の心に、どのような深い闇が拡がり、どのようなトラウマ（心的外傷体験）がもたらされたのか知りません。もちろん彼とこの例とは無関係であり、トラウマについて、イメージしやすい例として挙げてみたにすぎません。

#### 〈4〉「切断」をキーワードとして

この事件を、「切断」をキーワードとして考えてみましょう。「神戸の少年、十四歳」は、肉体を切断し親子、兄弟関係を切断し、友だち関係を切断し、教師―学校関係を切断し、社会関係を切断してしまつたのです。

ヒトは、ヒトとの関係ではじめて、ヒトとなる関係的存在なのです。願わくば、つぎのような関係でありたい。インドの詩人、タゴールの詩です。

はじめ

わたしは どこから きたの？

どこで わたしを ひろつたの？  
こどもが おかあさまに ききました。

おかあさまは こどもを むねにだきしめて  
はんぶん泣き はんぶんわらいながら  
こたえました

あなたは おかあさまの  
ねがいだつたのよ かわいこ  
わたしの ところに かくれていたの。

あなたの おかあさまが  
こどもの ときに あそんだ  
おにんぎょうの なかに いたの。

.....  
.....  
あなたは わたしの のぞみと  
愛のなかに わたしの  
おかあさまの いのちのなかに  
わたしの いのちと いっしょに  
いきて いたのです。

・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・

あさのひかりと いっしょにうまれた

天からの はじめての いとし子よ

せかいの いのちの 川にうかんで

ながれて とうとう わたしの

こころの きしべに のりあげたのよ！

(後略)

(タゴール著作集1)

この詩聖の詩いあげた世界は、たんに母―子関係を超えて、宇宙の絶対的存在―ひとの関係を想像させる上昇力を感じさせてくれます。ここには絶対的な信頼感があり、濃厚な、べとべとした甘やいだ関係を突き抜けた、自立した関係に進む予兆があります。

関係的存在であり、それ以外の存在ではありえないヒトは、豊饒な、自立した関係(マルチン・ブーバーの根源語「我と汝」という関係?)を築いていかねばなりません。

(5) 現代社会の歪みと「神戸事件」から学ぶこと

私は、カウンセリングを通して、中、高生たちと関わってきました。不登校であったり、拒食症であった

り ・ ・ ・ ・ ・

「神戸の少年、十四歳」が、たまたま不登校であったので、不登校≠病氣、危険な存在、という、きわめて安易で、短絡的な誤謬にみちみちた等式が、定立されそうになりました。

私たちは、ある歴史的事実を、はつきり記憶にとどめておかねばなりません。

一八五九年、『種の起源』が、ロンドンで出版されてから、「自然法則による適者生存の法則」は、人間社会にまで拡大解釈され、生存競争に生き残れない弱者は、淘汰されるのが必然とされたのです。このような思想、「社会ダーウィニズム」は、ニーチェや法学者たちの「理論」に勢いを得、障害者安楽死論へと転落してしまつたのです。

現代の家族や人間関係が、ホテル家族やヤマアラシ症候群に象徴されるように、希薄になってしまいました。『家族狩り』(天童荒太著)は、すさまじいまでの荒廃した家族、人間の心理を、教師と生徒関係を含めて、鋭く抉りだしています。

いじめが社会問題化したとき、教育現場の荒廃が非難され、親子関係の断絶が、ため息まじりに語られるとき、『兎の眼』や『少女の器』(灰谷健次郎著)が読みつがれてきたのでした。

工業社会から情報社会へ。エヴァンゲリオン現象、インターネット、ヴァーチャル・リアリティ、タマゴツチ、PHS・・・。

私のような、オジサンには、なんだか遠い世界のよう  
うに思えてきます。

ますます個人は、孤立し、関係が希薄になり、コミュニケーションが苦手になる。都市化したところでは、その傾向が加速するでしょう。

この事件が起こったとき、教育に熱心なママたちは、「んまー怖いわねー」や「つば、私立にいれなくっちゃ」と、井戸端会議の結論を出し、娘や息子に拒絶されがちだ。ワーカホリックのパパたちは、酔眼のかなた、週刊誌の刺激的なハウツーものに、救いを求めたかも知れません。

コドモ（社会）の歪みは、オトナ（社会）の歪みからくるといわれます。オトナ（社会）の、不正、不公平、差別、癒着、偽善、見える暴力、見えない暴力、構造的な悪のシステムを正していかねばなりません。

しかし、ヒトには、根源的な悪がぬきがたく潜んでいるので、その歪みは、なかなか正されません。シモーン・ヴェーユのことばを借りていえば、ヒトには、つねに罪に陥る、下降する重力が働いており、絶対者の力（恩寵）にすぎないのかもしれないかも知れません。

かくてイエズスは、「父よ、彼らはなすところを知らざる者なれば、これを許したまえ」とのたまひけるに  
・・・（ルカ二三―三四）

と、聖書記述者の慧眼は、慈しみぶかく、人びとにそがれるイエズスのまなざしを記述しています。どこから来て、何をなしたるかを知らない存在としてのヒト。どんなに理性的であろうとしても、その限界はあきらかです。

「神戸の少年、十四歳」が、「儀式」としての「バモイドオキ神」を、「崇拜」したとしても、混沌のなか、何をなしたるかを知らないといわざるをえません。

私自身、「幼児洗礼」にはじまるカソリシズムの中で、育ってきており、多少、超自然的体験らしきものに触れてきてはいますが・・・。

オトナ（社会）が、「神戸事件」を通して、ウチとソトの根源的な悪を認識し、歪みを正し、学校の教育現場でも、もう少し、まっとうな、人権教育、環境教育、消費者教育、健康教育（食を中心とした）、人間関係能力を高める教育、考える力、判断力を高める教育を豊かな環境で、実践してほしいと願います。

# 例会報告一 九七・六

六月一日に渋谷「ウイメンズプラザ」にて例会が開かれた。「キリスト教と仏教の間で揺れる西欧のフェミニストたち」という題で岡野治子さんによる発表だった。朝日新聞に例会のお知らせが載った事もあつたか、一般の参加者も大変多く、盛会だった。

岡野さんは、昨年、ドイツ、オーストリアの各大学で「キリスト教と仏教の対話の可能性」などのテーマで教える機会を持たれている。一年あまりヨーロッパに滞在され、西欧のフェミニスト達の現実に触れて、発表の方も具体的に興味深い内容だった。その後、朝日の夕刊（七／一）に岡野さんの談話と当日の例会の様子が報告されたので、ご覧になった方も多いだろう。当日の発表の概要は次の通りだ。

## はじめに

ヨーロッパのフェミニスト達はキリスト教に限界を感じ、仏教（仏典）を何の組織的拘束力もない所で新たにとらえ直し、いわば「ヨーロッパ仏教」をスタートさせようとしている。その為、アジアの人々によるフェミニスト視点からの仏教の意味付けが現在、期待

されている。

1. 既成宗教に対するヨーロッパ人の不信感（ナチズム台頭に際しての教会や文化・知識人の無力さへの反省）と異宗教（仏教、イスラム教、新宗教）に対する関心の増大

西欧フェミニスト達は現在大きく二つに分かれている。一方はキリスト教の現状を変えようと努力する人々。もう一方は仏教や他の宗教へと改宗する人々だ。戦後のドイツで仏教に改宗した人々が五万人と言われている。

## 2. キリスト教フェミニスト達の現状

ヨーロッパにおいては、アリストテレスやトマス・アキナス等の影響によって近年まで「人間＝男」という観念が支配的だった。ドイツでは五十年代末になって初めて「神学部」に女性を受け入れるようになった。バチカンがフェミニズムに対していまだに閉鎖的で、女性が神学の講座を担当するのに「自分をフェミニストだと言わない」「マリアの処女性を認める」といった条件を挙げている。そういった障害は存在しながらも、昨年、オーストリアで開かれた「教会の女性会議」には全世界から一、〇〇〇人が参加し、南北問題から教

会の性差別の問題まで広く話し合われ、プロテスタント、カトリックの女性達が宗派を超えて手を携えようとするなど、変化は徐々に現れつつある。

### 3. 仏教に転宗したフェミニスト達の活動

一方の、キリスト教と訣別し、仏教徒になった女性達にその理由を聞くと、キリスト教の次の点に失望したという答えが返ってくる。①キリストが男性であり、使徒として男性だけを選んだ、と理解されてきた事。

②神と人間という二元論が次元の違う人間の性差にも適応され、その結果性差別が固定化された事。③神が一度だけキリストの中に受肉された事。④教会の絶対性、排他性をもたらし、その結果、キリスト教が暴力的なものになった事（例、教会によらなければ救いは与えられない、又、教会による植民地化、戦争を容認するといった事）。そういったキリスト教に比べ、仏教の方が「理性的」であり「科学的」、「非暴力的」であると彼女達は言う。「メデイテーション」も彼女達の心を捉えている。

現在、仏教フェミニスト達にとっての指導的立場にある人々の主張を紹介したい。

Vajramala (ヴァジュラマラ チベット仏教系教団の西欧の指導者) 瞑想を続けると、男女の

違いというものは単なる現象に過ぎない事が分かる。すべてを相対化する事ができ、絶対者はいなくなる。この時、差別・排除の論理が壊される。

Aya Khema (アヤ・ケーマ 上座部仏教の尼僧教団設立を目指す) 誰の脳の中にも右脳、左脳がある様に、全ての人の中に女性面、男性面がある。ブツダは男性という性に固着しなかった。仏教が全体性を重んじる宗教である所が大切だ。

Rita M. Gross (リタ・グロス 米国人) 如来像は誰もがブツダになれる事を示している。また「智慧」や「愛」も女性の表象を取っている。又、仏教は心身を統合的に考える。両性具有を大切にする仏教を創っていきたい。

Joanna Macy (ジョアンナ・メイシー 「解放の神学」ならぬ「解放の仏教」を提唱。「縁起」の思想に注目) 瞑想によって解脱したならば菩薩となつて現世に戻り、衆生の救済に赴かなければならない。ところが東洋仏教はその個人と社会との谷間を埋めようとしていない。欧米の女性仏教徒こそ、その役目を担わなくてはならない。

発表後、会場からは活発に意見や質問が出された。「西欧フェミニスト達の仏教、仏典の取り上げ方が、

長い間仏教を学び、仏教界の現実を見ている私には「ご都合主義」のように思われてならない。「私達尼僧も、西欧女性がキリスト教へ持った不満を仏教に対して抱いている。」といった発言には岡野さん自身も「確かにキリスト教嫌悪による反動として仏典が都合よくとらえられているという面があるので、ヨーロッパでの仏教理解を日本に無批判に輸入するというわけにはいかない。」と同意されていた。又、「欧米の女性仏教者と討論する場を作ってはどうか。」という意見も会場から出ていた。（文責 千葉悦子）

## ・参加者の感想・

小松 加代子

ヨーロッパ諸国で、女性に対するキリスト教の抑圧的な要素を超える可能性を持つものとして仏教が注目されている、というお話は非常に興味深いものだった。その注目点は、二元論を超越する空の思想と瞑想、相対化される仏の存在といった非常に論理的なところにあるように思えた。仏教の教団組織を持たないヨーロッパでの自由な発想は仏教諸国からは出にくい新しい

仏教のあり方を示す可能性を持っているのかもしれない。ほんの一握りの知識階級のものとして留まるのか、あるいは組織化されて変質するのかもしれないのか、またあるいは既成仏教批判の力を持つのか、他の仏教諸国の女性たちとの連帯は可能なのか、など、今後の展開に非常に興味を引かれる。

津田 広志

大変興味深く聞け、重要な内容を含んだ充実した報告だったと思います。お話の仕方、まわりに適切な配慮があり、とても感じがよかったです。

内容的には、特に西欧での仏教理解が、瞑想や身体あるいは両性具有を重視している点に共感しました。

私見ですが、瞑想に関しては、いままで、瞑想の歴史において意識を下向きに向ける瞑想法（これがヨーガでいうところの女性原理）が不当に黙殺されていて、せいぜい眉間や丹田に意識を置く瞑想法（浄土教や禅宗）が限界でした。現在は、新しい宇宙観を伴った「フェミニズム・メデイーション」が開発される必要があると思います。また身体性については、エコロジーのような「健全な」身体観だけでは、現代の病的な文明に対しては十分に応答できず、新たに身体の「無機質性」に着目した身体観の確率が急務だと思

ます。キリスト教でいうところの無機的な荒野（あら）の）にいる身体感覚を身につける事といったら分かり易いでしょうか。この身体感覚を身につけると、厳しいというより、反対にものごく決断力がついて楽になる感じが私などなのですが……。最後に両性具有は、現在ではユング心理学の女性・男性原理といった単純な考えは通用せず、ゲイ／レズビアンの考察から生まれた「実体なき主体」「本質なきアイデンティティ」と呼ばれるクイア理論に発展していますが、現代宗教もこの地平に参戦する必要があると思います。男性／女性ばかりか、知識人／民衆、ころ／からだといった不毛な二元世界からの脱却と統合がなされる事を願っています。

勝又 美保

イギリスから帰ってまもなく、このような会があるという事を知って、喜んで仙台から駆けつけました。岡野さんのお話によると「西洋のフェミニストたちが、性差別的なキリスト教の体制、教義に耐えられず、教会から離れる傾向にある」ということでしたが、彼女たちが、キリスト教に対する本物の信仰を持っているならば、「体制など関係ない」という強い意志が、彼女たちを教会に留めるのではないか、とちよつと思っ

たりしました。

千葉 悦子

「教会の暴力性」という所が印象に残りました。カトリックには「告解の秘跡」というのがあります。自分の犯した罪を司祭に告白することによって罪の許しを受けるというものですが、私にとってこれは一種の暴力なのです。告解へのこだわりは私の人間的な弱さなのか、あるいは教会をこそ批判すべきなのか……。この秘跡は、キリスト御自身が復活後、使徒達への出現の中で「あなたがたが罪をゆるす人にはその罪がゆるされ、あなたがたが罪をゆるさない人はゆるされない（ヨハネ二〇―二三）」と語った事がもとなつています。教会の性差別をめぐってよく言われるのは、それはキリスト自身の問題ではなく、教会の教父達や聖書学者達の解釈の問題だという事です。排他性や性差別もキリスト自身の中に内包されていたものなのか……。西欧のフェミニスト達がキリスト教に留まった人と他宗教へと離れた人に分けられる、その違いは、そこをどう結論づけたか、にあるような気がするのです。

## 編集後記

二四号と二五号の編集を千葉悦子さんと二人で担当することになった。特集のテーマは「暮らしと宗教——宗教は生きて働いているか——」。生きていてほしいという願いをこめて設定した。

原稿が集まるかとても心配したが、依頼した約八割の方々から寄せていただき、ほっとしている。

「葬式仏教」とは仏教を侮蔑的に指す言葉であるが、最近ではお葬式も無宗教、自然葬を希望する人が増えた。この夏、知り合いのかた二人が亡くなったが、どちらも無宗教でお葬式をしなかった。もう葬式仏教の看板も降ろすべき時が来たのだろうか。オウムの信者に「仏教寺院は風景でしかなかった」と言われた日本の仏教はこれから何を根拠に存在を続けていくのだろうか。

一方、日本のキリスト教徒の数は公称人口の1%といわれているが、実質はそれよりずっと少ないらしい。それにもかかわらず売り物の結婚式が盛況であるのはめでたいことだ。すでに日本の風景として立派に定着している。

宗教がアヘンだとしたら、人類の歴史上、ほとんど

繁栄の頂点を極めていると思われる現代日本においては、宗教は「風景」としてひっそりと佇むしかないだろう。

この文を書いている九月六日、マザー・テレサが亡くなったことを新聞の報道で知った。このかたを見るにつけ、神は生きて働いておられたとしみじみ思う。極貧の人々の上にか宗教（神、或いは絶対者）の働きを見ることができないとしたら、やはり宗教はアヘンなのかもしれない。

今号では急遽、神戸と教育に関わりを持つ方々に「神戸事件」について感想あるいは意見を書いていただいた。また遠方で例会に出席できない方のために、六月の例会報告と出席者の感想も寄せていただいた。二五号でも続けていきたいと思っている。

一九九七年の年会費（三千円）がまだの方は振込み用紙を同封しますので、ご送金よろしくお願ひします。

（山田 恵子）

**Womanspirit No.24**

一九九七年九月発行

発行 フェミニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒180 武蔵野市関前五―五―二五

奥田方

T/F 〇四二二(五三) 八七四六

郵便振替 〇〇一七〇―九一八〇三一

定価 六〇〇円

印刷 (有)オクノプリント社